

■ 国際協カイニシアチブシンポジウム報告

2月22日（日）に文部科学省委託事業、国際協カイニシアチブシンポジウム「世界にはばたけ日本のカー障害児教育分野における青年海外協力隊派遣現職教員サポート体制の構築」を開催しました。シンポジウムでは、藤原義博センター長より本事業で取り組んだ3年間の実践の成果報告があり、続いて帰国隊員の長谷川智子先生（マレーシア・トレンガヌ州教育局配属）と、吉田高徹先生（同社会福祉局配属）より、現地における隊員活動の実践や帰国後の活動について報告がありました。



本事業の成果でもある「国際協カイニシアチブブログ」による隊員サポートは、これからも本センター事業として継続していきます。各附属校の先生方にはブログサポーターとしてお世話になりますが、今後ともご理解とご協力のほど宜しくお願いいたします。

■ 研究紀要「特別支援教育研究第3巻」発行のお知らせ

「筑波大学特別支援教育研究 第3巻」をまもなく皆様のお手元にお届けいたします。連携研究・助成研究、センター研修生の実践研修報告、各附属学校の先生方からの実践研究、昨年度のセミナーの講演概要など多岐にわたった内容となっております。以下、目次を掲載いたします。

筑波大学特別支援教育研究第3巻刊行にあたって：藤原 義博

実践研究

聴覚障害の早期発見に伴う保護者の心情に配慮した支援について

－新生児聴覚スクリーニング受検児の保護者に対する面接調査の結果から－

佐藤 操・庄司 和史

高等学校に在籍する肢体不自由のある生徒に対する学習支援

松浦 孝明・城戸 宏則・田丸 秋穂

小学部児童における聴覚条件と発話明瞭度の関係

板橋 安人

連携研究：知的障害特別支援学校における肢体不自由を併せ有する重複障害児への教育プログラム改善に関する研究

安川 直史・中村 晋・杉田 葉子・若井 広太郎・吉井 勘人・安部 博志

中村 敬子・加藤 裕美子・松原 豊・瀬戸口 裕二

連携研究：視覚障害用アセスメント・教材教具等の肢体不自由児童・生徒への

適用に関する研究（2）－見えにくさのある肢体不自由児に有効な指導法の検討－

田丸 秋穂・城戸 宏則・雷坂 浩之・丹所 忍・星 祐子

実践報告

知的障害特別支援学校における自立活動担当者の学級支援

－不適応行動を示す児童のコンサルテーションを通して－

長岡 里実子・瀬戸口 裕二・藤原 義博

助成研究報告：障害者用自転車座位保持装置に関する研究

城戸宏則・田丸 秋穂・松原 豊

講演概要

ロマンチックサイエンスと教育

前川 久男

事業報告

平成19年度特別支援教育研究センター事業概要報告

■ 現職教員研修

平成 17 年 4 月にセンターの現職教員研修事業が開始され、今年で足かけ 5 年目を迎えようとしています。私は 2 期目から研修事業担当者として研修に来られた現職の先生方のお手伝いをさせていただきました。

これまでに、北は秋田、南は広島という遠方から家族と離れて単身で来られた方、毎日 2 時間以上をかけて通って来られた方、特別支援学校の宿泊施設に泊まりこんで実践研究をされた方、半年間で全国を股にかけて調査研究をされた方など、皆さんの特別支援教育に対する熱意には頭が下がるばかりです。

専門の障害領域や研修コース（指導法重視型とコーディネーター養成型）が異なっているため、研修生全員が顔を揃えるのはセンターが独自に実施する週 1 回の講義・演習の時でしたが、それでも時間があると研修生控え室に集まってお茶を飲みながら情報交換をしたり、それぞれの専門的な領域からアドバイスしたりすることでお互いに刺激し合っていました。

毎年、ムードメーカー型、頼れるリーダー型、パワー全開型、実直素朴型など実に個性豊かなメンバーが揃っていましたが、報告会の前には協力しあって資料作成や報告書の印刷製本をし、夜のコミュニケーションも大いに盛り上がるなどチームワークの良さを見せてくれました。

私は主にコーディネーター養成型コースで研修される先生方と、小学校・中学校の通常学級の児童生徒の支援や保護者支援、教育委員会の研修などを行ってきました。皆さんとても素晴らしいアイデアを発揮し、写真にあるような子どものニーズに合った支援グッズを作成してくれました。子どもや保護者、担任の先生、校長先生など多くの人からも信頼され、今でも学校にお伺いして先生方や保護者にお会いすると「〇〇先生お元気ですか？」「△△先生は来られないのですか？」と尋ねられることも多く、研修生の努力の成果がここに結実しているとうれしく思います。

センターでは研修修了後のアフターフォローとして、研修生 OB の様々なニーズ(できる範囲ですが)に応えています。一期一会、袖振り合うも多少の縁などと言います。同じ釜の飯を食った仲間同士として今後もよろしくお願ひします。

(松原 豊)



心理検査の演習風景



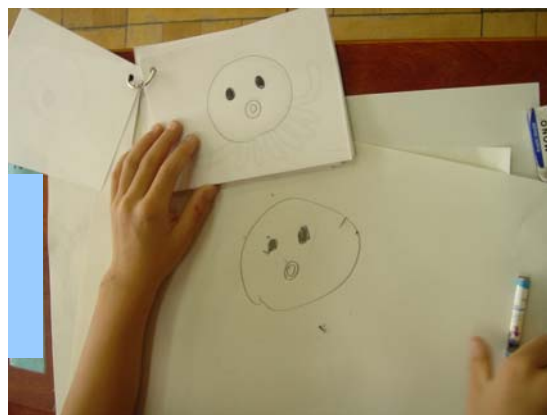
視点を定めやすくする観察フレーム

たし算 くり上がり表 全部で36通りだよ

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
5	5	7	8	9	10	11	12	13	14
6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
9	10	11	12	13	14	15	16	17	18

算数科の授業で
つぎのたし算の答えを
全部で36通りだよ

見て覚える繰り上がり算表



継次処理的に絵が描けるカード綴

【 現職教員研修 修了生の声「苦言・提言」 】

私は現在、小学校の特別支援学級の担任をしています。近況報告・・・毎日、1年生～6年までの子ども達15名と、この時期は「クッキーを100袋作るぞ」をテーマに卒業生へのプレゼント作りの单元まっ最中です。2005年の春から一年間、筑波大学特別支援教育研究センター及び附属学校の先生方には、大変お世話になりました。今思えば「あっという間」の一年間でした。様々の方々に支えて頂きながら研修生活を過ごすことができました。感謝の気持ちでいっぱいです。



特別支援教育では、これまで以上に高い専門性が求められる中、研修中に書き取ったノート数冊が私の財産となり、何度も付箋を付けて目を通しながら、子ども達の支援に役立てています。附属学校での研修では、支援部の先生方と衣食住（少し大げさですが）を共にした思いです。先生方の対応はいつも笑顔。いつもどんなときでも笑顔を絶やさず、相談で来校されている人達が安心できるように状況を整えていました。相談・支援で一番大切なことを教えていただきました。また、教材研究に加わり具体的な支援方法について、議論し合えたことで子どもの得意な方略を見つけてあげることの重要性を学ぶ機会となりました。その成果が「子どもと家族を支える特別支援教育へのナビゲーション」で発刊され私のバイブル本になっています。

研修後は、中学校特別支援学級の担任そして小学校へ。これで特別支援学校からスタートして小・中と全ての学年の子ども達と接する場がもてました。福祉や医療機関の方との交流も深まりました。今後、生涯に渡り一貫した支援体制が構築されるように微力ながら力になっていければと思っています。

最後になりますが、研修中に多くの仲間ができました。毎年夏には年一回の旅行に、忘年会は茗荷谷集合です。今年の夏は静岡へ 「研修の共は、一生の友」

（平成17年度 修了生 千葉県八千代市立米本南小学校 内野 武弘）

■ 巻末言

特別支援教育研究センターが開設されて5年が経過しました。この5年は、私自身の歴史ともなりました。いち早く特別支援教育体制の課題を見据えて、「研究」「研修」「啓発・発信」を担っていかうとした気概に満ちた歴史でした。

そんな中で、ある情景が忘れられません。ドーナツ型の赤い円形チップと青いチップを使って、「これは何色？」を子どもに尋ねていたとき、何回尋ねても答えてくれなかった子どもが、チップをのぞき込んでいたのです。とっさに、「いいことあるぞ～」とつぶやいてみました。すると「ミスタードーナツ！」と子どもが答えました。そこからは、チップを重ねてハンバーガーが手元にできあがり、隣にいた母親の口元に持っていき、「おいしい。」としゃべり出したのです。大人が尋ねていたことと違う世界が、子どもの中で大きくふくらんで、豊かにはじめていく瞬間を見るようでした。そこで、赤と青のチップの間に黄色のチップを挟んでみると、「信号!」「あか、きいろ、あお」、子どもの口からは次々にことばがほとぼしり出てきました。

子どもは、何に意味を見出して、どのような意欲や楽しさに支えられて、大人との世界を理解し、一緒に過ごそうと思ってくれるのか。教育の原点を教えられたときでした。

6年目に入る特別支援教育研究センターという子どもが、意欲的で豊かな意思を持った組織として、さらに大きなチャレンジを続けていくことを願っています。 （瀬戸口 裕二）